

エッセイ — 【特集】「継承語教育」を問い直す

## タイ国内の移動を繰り返した親と子の言語生活

日本語拒否から、子どもが自分で日本語の価値を見出し  
新たな挑戦を始めた我が家の物語

ツムサターン 真希子

© 2021. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

### 1. 「もう漢字を勉強したくない！」

わたしは職業軍人のタイ人の夫と、高校1年生16歳の息子と中学2年生14歳の娘をもちタイで暮らしている。夫の仕事の関係でタイの中でも移動を繰り返し、日本人のいない地域で懸命に子育てをしてきた。そんな状況で子どもの日本語習得を必死で目指し、「日本語習得にはまず漢字。漢字が読めてこそ読書が進み、読書が進んでこそ日本語が習得される。日本語習得の要は漢字だ」と考え、様々な工夫を凝らして日本語学習に取り組んできた。決して一方的な指導ではなかったし、強制もしていなかった。子どもたちも楽しんでいたはずだった。そう思っていたが、ある時、息子から言われたのが「もう漢字を勉強したくない！」ということばだった。息子が小学校4年生の時だった。本稿は、漢字指導に拘ってしまったわたしと、わたしの日本語学習を拒否した息子のストーリーを中心に、親と子の、ことばの学習をどう捉え価値づけていったかという我が家の家族の物語である。日本国外で子どもを育てる日本人の親の気持ち、日本国外で育てられた子どもの気持ちを、生活の中の言語活動を通して語ってみる。

## 2. 我が家の移動物語

タイをご存知の方なら、タイの地方都市とバンコクの差が日本の東京と地方の違いの比ではないことをご存知だろう。わたしが住んだのは、そんな地方の中でも軍の施設のある土地で商業活動とは無縁の地域である。ここで我が家の移動人生を紹介する。わ



たしの生まれは東京で、日本での地方生活の経験も移動の経験もない。それが結婚と同時に、まずはタイ中部ナコンサワン県へ移動し4年過ごし、息子は2歳までここで過ごした。夫は日本留学経験があって日本語ができたので家の中は日本語だった。ナコンサワン県は中部とはいえ日本人はおらず、もちろん日本の食品も手には入らない不便な場所だった。住んでいた軍の施設では単身赴任がほとんどで、日中家の近辺に誰もおらず、わたしは息子と二人きりで過ごした。他の家族や子どもと接する機会が全くなかったので、2歳になっても物静かな息子のことばが遅いのかどうかも全く分らなかった。娘が生まれ、半年が過ぎ、息子が2歳半の頃、わたしたちは夫の転勤で日本へ行くことになった。日本滞在は2年と分かっていたので、いつも子育てに関する情報にアンテナを張り、吸収できることは何でも吸収したいと意気込んでいた。その中のひとつが図書館に行くことだった。日本と比べるとバンコクは本の充実した図書館がほとんどない。タイ語では「本を読む=勉強」と表現され、読書の楽しみを知らない人も多い。わたしは読書好きなのだが、当時タイの田舎には子ども向けの絵本も児童書もほとんどなかった。タイへ戻ってきてから本の思い出を一緒に語りたい、勿論本好きになって欲しいと思い、わたしはとにかく子どもたちと図書館へ足しげく通い、毎日毎日たくさんの本を読み聞かせた。そして2年がたち、息子が4歳半、娘が2歳半の時タイへ戻った。日本で息子は日本の幼稚園年少クラスにも通い、ことばの遅かった息子も、盛んにしゃべり出し、娘は最初からおしゃべりで活発な言語生活だった。タイへ戻ると、夫はまたすぐに単身赴任で北欧へ飛んだ。夫のいないタイに残されたわたしたちは、夫の実家のあるタイ東北部チャイヤブーム県で2年過ごすことになった。

### 3. 我が家の移動

夫の実家のあるチャイプーム県で、子どもたちは初めてタイの幼稚園生活を体験した。当時日本から戻ったばかりの子どもたちの生活は日本語中心で、タイ語はゼロスタートだった。夫の実家近くにあったタイの幼稚園に通うことになった息子は、初日「トイレ」「水」というタイ語だけを覚え、心細気に登園した。幼稚園にはタイ語を教えてくれる“特別補助”の先生は存在せず、タイの他の子どもに合わせて園生活に慣れていくしかなかった。息子はさまざまな環境の変化についていくのが非常に大変そうだった。そして幼稚園に通い出し、ほどなくして吃音が出始めた。ことばを発する時、初めのことばが出にくい難発型というらしい。肩をいかにせのけ反りながら、言いたいことばを絞り出した。こんな状況が数か月続いた。わたしは吃音のことは何もいわず、ただ背中をさすり、いつか消えるのだと自分の気持ちを落ち着かせた。息子が安心できるように日本の思い出話や、読み聞かせで好きだった本を一緒に広げて読んだ。知っている文字や読めた文字があるとオーバーなほど褒めたものだ。一方、娘は、まだ通えない幼稚園に行く兄が羨ましく、毎日幼稚園の送迎に同行した。息子が帰ると幼稚園での出来事を一生懸命聞いていた。

子どもたちは徐々にタイの田舎の生活にも慣れていった。祖父母との暮らしの中、どっぷりとタイ語環境に浸かり、近所に住む親戚一同からの愛情をたっぷり受け、二人ともめきめきとたくましくタイ語を身に付けていった。

しかし、わたしはタイ語を頑張っている子どもたちを見ながら、それまで培った日本語力は衰えないだろうか、タイの地方にこのまま住み続けたら、子どもたちの日本語力が低下してしまうのではないかと、焦燥感を抱くようになった。夫の仕事は転勤が多く、しかも、この先どこへどのくらい移動するかがまったく定かでないため、今後引っ越した先では日本語話者がわたし一人ということは容易に想像され、孤独感も常につきまとった。それに、地方暮らしは日本人との交流機会がなく、子どもたちが接する日本語がわたしだけで果たして大丈夫なのだろうかという不安感も拭えない日々が続いた。

そんな日々の中、わたしは日本滞在中に子どもたちが身につけた日本語の会話能力、そして少しずつ覚えつつあったひらがなとカタカナをどのように保持し、そして伸ばせるかについてひたすら考えるようになった。そして、その方法として到達したのが漢字を軸に家庭内で文字指導をしていくことだった。

#### 4. 私が拘った日本語教育

息子は日本滞在中、日本の幼稚園年少クラスに1年通っていた。わたしはそこで出会った仲の良かったママ友に1年先の文字学習を勧められた。幼稚園年少でひらがな、年中でカタカナ、年長では小学校1年生レベルのもの、というような一步先の文字学習をするものだった。息子は日本の幼稚園生活で図鑑や大好きなキャラクターの本を通して、ひらがなとカタカナを何となく覚えつつあったため、これからタイへ戻っても、ひらがなとカタカナの強化、その次は漢字という自然な流れでできるように感じた。それまで子どもの教育を他人に相談することのなかったわたしは、信頼できる友人のことばを育児指針と考え、それを目標にすることにした。

しかし、実際にはどのように進めたらよいか分からなかった。そんな中見つけたのが、学年別漢字配当表だった。漢字学習にあたって、どの漢字から教えていったらよいか分からなかったわたしにとって、学年ごとに簡単な漢字から紹介された漢字配当表は本当に魅力的だった。実際、低学年の漢字は画数が少なく、日々の練習ドリルを進めやすかった。わたしには、学年別漢字配当表はいわばカリキュラムのようなものだった。この配当表に沿ってきっちりと漢字学習を始めればよいと思い、実践した。

漢字学習を進めたもう1つの理由は、日本一時帰国の際の小学校体験入学のためだった。「とにかく漢字を一つでも多く覚えていれば、国語だけでなく他教科の教科書も読めるようになる。そうしたら、小学校へ体験入学をしても授業についていける。短い学校体験ながらも充実した学校生活が過ごせるだろう」と思ったからだ。それに漢字ができるようになれば、読む力がつき読書の幅も広がると漠然と思っていたことも理由の1つである。

このようにわたしはひらがな、カタカナ、漢字と順序だてて教え、漢字習得数を増やしていくことが、子どもたちにとって読書、そして日本の生活を深く関わらせる条件になると信じていたのだった。そして、そう信じるのが、タイの地方都市で一人で日本語で子育てをするわたしには大きな安心となった。文字学習に拘ったわたしは、毎日幼稚園で出るタイ文字の塗り絵などの宿題に便乗する形で、日本語のひらがな、カタカタ、漢字のドリルを始めたのだった。だが、ドリルをやらせればなしだったわけではない。わたしは、ドリルの練習の後どのように文字が記憶に留まり、定着するかをいつも考えていた。そこで色々記憶に残すために工夫もしていたのだった。

## 5. 私の工夫

例えば、子どもたちが漢字を選び、体で形作るゲームをした。両手を広げ、「大」という字を作ったり、息子が人偏、娘が両手を広げ、ほうきを両足の下からのぞかせ「休む」という字を作ったりした。そのようなことをしているうちに、タイ人の祖父母に「これは日本語の文字の一つの漢字とって、こんな風な形で、文字自体に意味があつてね」と得意そうに話すようになった。祖父母は、日本語ができる子どもたちの頭をなで、抱きしめた。たどたどしいタイ語を話す孫たちの言っていることを理解していたか疑問だが、何を説明されてもうんうんと頷き褒めちぎってくれた。子どもたちは覚えた漢字を今度は覚えたてのタイ語で説明できることが誇らしく、祖父母に褒められ嬉しそうにしていたのを覚えている。伝えたいと思える人の存在は大きな意味があると思う。子どもたちはこのようにして、楽しんで漢字を覚えていった。読解力もつけたいと思い、ひと学年終わると読み強化のためにその学年の全漢字を散りばめ、子ども自身が主人公となるオリジナルの読み物を作った。「自己紹介」、「ぼくの学校」、「私のクラス」、「タイの王室」、「タイの友達」、「日本の家族」、「日本の学校」など、子どもたちの実生活に関わりある事柄で作成した。例えば、タイトル「自己紹介」では「私の名前は、たけし（仮名）です。私のお父さんは、タイ人でお母さんは日本人です。（中略）今、タイの南にあるスラタニーケンというところにすんでいます。タイの学校に通っています。家で日本語のべん強をしています。お母さんとは、日本語で会話をします」といった具合だ。

自分のことが書かれているので、本の音読に誘った時よりも関心を示した。これはいいと思い、娘の時も息子同様に娘バージョンを作った。子どもたちとの日々の会話から、題材は山程思い浮かんだ。

息子が小学校に入学する時期、夫の実家タイ東北部チャイヤブーム県から、夫の次なる勤務地となったタイ南部のスラタニー県へ引っ越した。そこには5年半滞在した。ここでももちろん、気軽に子育てについて語れる日本人はおらず、わたしには日本人親としての孤独感が常につきまとった。だからこそ子どもとの日本語の勉強は、わたしにとって大きな楽しみだった。家から学校まで毎日片道40分ほどの登下校中の車内で、プリントアウトした自分が主人公の読み物を音読練習した。子どもたちはすぐに内容を暗記してしまうので、ところどころ漢字や文章を変えたバージョンを作った。子どもたちがそれぞれ3年生の時まで作り続けた。

この40分の登下校中の車内の時間は、子どもたちとわたしが密に日本語で話をする特別な



空間だった。そのようなわたしと子どもだけの空間は、格好の日本語学習の場でもあった。運転手のわたしは、後部座席で音読をする子どもたちから「この漢字が読めない」と言われても、見ることができないため、子どもたちは一生懸命自分の読めない漢字をわたしにことばで伝えた。「上がハで下がムって書いてある」。わたしは運転中でも頭をフル回転させ「それはコウと読んで、公園のことかな」と答え、「カタカナのケケは何？」と聞かれれば「竹」と推測して答えた。以降「ケケがついてる」と言われたら、息子が読めない竹カンムリの漢字を聞いているのだと想像できた。「上が帽子で、一、ム、土って何？」と聞かれたときはかなりの難問だったが、理科室の「室」のことだった。他、「シチロー」は活動の「活」、「つちのこに斜めのお父さん」は「教」の漢字の説明だった。子どもたちには、このように漢字が見えているのか、と新鮮な気持ちだった。家では、わたしが子どもたちになぞなぞ漢字問題を作ったりもした。

インターネットが普及し、当時、田舎でもスマホが一人一台の時代になりつつあったが、使いこなせる自信がなかったわたしは、できる限りアナログでいようと心掛けた。家の中はもちろん外でもスマホなどは避け、日本語での会話の機会を増やし、楽しいものは自分で作り出そうと頑張っていた。そんなわたしがアナログの楽しい工夫としてやっていたのが、野外での漢字学習と漢字を使った遊びだった。

子どもたちと住んだ東北部や南部は、娯楽施設こそ乏しいけれど、幸い自然が豊富で十分に自然の中で楽しさを見つけ、ことばを育てることができた。南部の家は小一時間のドライブですぐに海に出られた。息子は浜辺で集めた貝を床に並べ、娘に「貝」という漢字を教えた。以来、水に関係のある漢字を覚えると貝を並べて娘に教えていた。川、水、雨、海、魚、と漢字を覚えるたびに海へ出かけ、貝殻を増やしたのもいい思い出だ。

週末に出かける浜辺では、よく『ビーチフラッグス』というスポーツをした。数メートル先に立てた旗を取る『旗とりゲーム』だ。勝敗の結果を「正の字」で書くようにすると、子どもたちはそれまで書き順があやふやだった正の字をすぐに覚えた。紙でなく砂浜に、鉛筆ではなく足で描くことで書き順が記憶できたようだ。日々の文字学習がこうした実体験とつながる瞬間が、子どもたちの記憶に漢字が定着するチャンスに思えた。

## 6. 息子の漢字学習拒否

しかし、こうした漢字学習が楽しさに結び付き、続けられたのは、小学校低学年の時期まで

だった。高学年の漢字は、それまでのように実体験と繋げて学んだり、わたしから楽しさを提供することができなくなっていたのだ。画数は増え、低学年の漢字のように体で表せるものはなくなり、動詞は「求める」「伝える」等、日常使わないことばが増えていった。それでもわたしは日々の漢字ドリルを止めなかった。息子は、半径の「径」、条件の「条」など抽象的な漢字や、「労働」や「課題」などの難しい熟語の使い方が分からぬままドリルをこなし、よく「もう漢字は記号の塊にしか見えない。タイで使わないのになぜ覚えるの」と言った。息子の言う通りである。タイに住みながら、この難しい漢字を書くというシチュエーションはない。わたしも内心、「そう、その通り。なぜ覚える必要があるのか」と思っていた。息子が楽しくなさそうな様子から必要性の無さが伝わってきていた。しかしそれを理解していながら、わたしは認めたくなかった。そして漢字は書いていないと忘れてしまうからと、漢字ドリルや国語の教科書の音読などルーティンワークの姿勢を崩せずにいた。今思えばそれは強制でしかなかった。そして、とうとう息子から「もう漢字を勉強したくない」と告げられた。決定的な一言だった。息子が4年生の時から、わたしは泣く泣く一旦家庭での日本語学習のすべてを止めた。それから一年以上何もしなかった。残念な気持ちは拭えなかったが、息子が日本語をそれ以上に嫌いになって欲しくない気持ちの方が勝った。このようにして、子どもたちとの楽しい活動だったはずのわたしと子どもの日本語学習生活は終わった。

## 7. 漫画との出会い

小学校4年生で息子の日本語学習は終り、息子が5年生の後期に南部から首都圏のパトユムタニー県へ引っ越した。いつも通り異動命令は突然で、引っ越し通達は3日前。思春期に入った息子にとって、慣れ親しんだ学校、友だちとの突然の別れ、そして5年生の後期からの新しい学校への編入、そこでの友だち作り、自分の居場所探しは大変だったようだ。「ダブルで二言語できても決してプラスではない」と言い、「学校では目立ちたくない、できるならダブルであることを隠したい」と言った。そんな時期でもあったので、わたしからまた漢字の勉強を再開しようなどと口に出すことはできなかった。そんな中、日本へ本帰国する日本人の方から大量の漫画を譲っていただいた。『サザエさん』、『ブラックジャック』、『おーい竜馬』、『クレヨンしんちゃん』、『名探偵コナン』など何巻もある続き物だ。それまで漫画は『ドラえもん』と化学漫画以外、家に置かずにいた。わたしは、漫画などの娯楽性の高いものは中毒性が高いと考

え、一旦漫画へ関心が向いたら勉強姿勢が崩れ、本離れに繋がると思っていたからだ。楽しさに結び付けて漢字学習に取り組んでいたはずなのに、漫画はどうしても受け入れられなかった。楽しく学ぶとは考えていても楽しさから学びが起こるとは思っていなかったのだ。その理由は、自分が子どもだった頃漫画を禁止されており、自分の子どもにも、漫画という楽しさが学びに繋がるという構図が当時描けなかったためだったように思う。しかしその頃、子どもたちは長い間日本語に触れていなかった。そんな子どもたちには日本語との楽しい時間になるかもしれないと思い、我が家で漫画を解禁することにした。これが子どもたちにとって、そして、わたしにとっても大きな転機となることになった。これは息子が6年生になる頃のことだ。

## 8. 子どもたちの出会った日本、日本語の世界

子どもたちは、わたしの想像以上に漫画にのめり込んだ。息子は初め『おーい竜馬』という坂本龍馬の一生を描いた漫画に手を伸ばした。上手く立ち回り偉業を残す龍馬の生き様は、新しい学校で上手に人間関係を築けずにいた息子の心に響いたようで、毎日とにかく漫画を手に取って読んでいた。初めは「読んで」いたわけではなく、すごい早さでページをめくり、絵を楽しんでいたように見えた。親から何か言うと、「ほっといてくれ」という時期だったため、わたしは口に出さず、目立たぬように、他にも龍馬関係ならこんなドラマや映画があると何気ない振りを装って紹介したり、息子が読めそうなレベルの本などを買ってきては、さりげなく近くに置いたりした。息子が数年ぶりに興味を持った日本の世界について、わたしも一緒に話がしたかったので、自分でも龍馬について調べたりした。そんなことをしているうちに、いつしかわたしも龍馬ファンになっていた。息子は、大河ドラマ『龍馬伝』や歴史の本など、漫画以外にもどんどん龍馬への興味を深めた。息子は、そのようにしては再び漫画に戻り、漫画以外にも興味を持つことをくり返し今もそのスタイルは変わらない。こんな『龍馬』活動の中で、自力で読めるようになった漢字や耳から入った言葉から漢字習得数がぐんぐん増えているようだった。ある日試しに「脱藩」という漢字について聞くと、「脱は脱出ゲームの脱、藩は土佐藩や長州藩の藩、よって脱藩とは藩を出ることだよ」と得意顔で答えてきた。「脱藩」以外にも「大政奉還」「公武合体」「薩長同盟」「尊王攘夷」等、思いもかけない漢字が読め、その数は驚くほど増えていった。龍馬関連のドラマを見たり、本を読むことから江戸末期の幕末の時代に詳しくなり、家族みんなに幕末クイズを出題したり、大好きな龍馬の魅力を力説するように



なった。こうして息子は好きなものに出会い、興味のあるものから読める漢字を着実に増やしていったのだ。漫画と出会ってたったの半年足らずでこれだけのことができるようになるなど想像もしていなかったのが、好きなものから学ぶそのスピードに、わたしはただただびっくりした。

そして6年生になった春に、日本に一時帰国した。その時、本屋でまず息子が向かったのは歴史コーナーだった。歴史人物大辞典など自分の読みたい本を決め、自分で選んで購入した。フリガナなしの難しい漢字が読める息子を褒めると、「分かりたいから何とか読めるんだ」と言い、数年前漢字が覚えられず、記号にしか見えないと言っていた時とは大違いだった。その年はタイミングよく、期間限定の『～坂本龍馬没後150年記念～』の特別展と重なった。初めて訪れた江戸東京博物館は江戸時代の空気が漂い、息子は龍馬の残した実物に触れることに興奮した。そして日本にはこんなにも龍馬ファンがいるのかと、その人の多さにも驚いていた。龍馬直筆の手紙や愛刀、龍馬暗殺時に血しぶきの飛び散った掛け軸、かの有名なブーツ姿で立つ写真など、息子はその時代の本物を自分の目で見られる感動を初めて味わった。「カッコいいなあ」と愛刀の前には一人長い時間立っていた。

こうして息子が『龍馬』の時代にどっぷり浸かっているとき、娘もある時代に興味を持つことで自分の日本や日本語の世界を広げていた。ある日、家の片付け中、娘がいろはカルタを見つけた。そこで一緒に遊んでみると、娘は遊びながらあつという間に諺を覚えてしまったのだ。そして、タイ語にもある同じような意味の諺を、わたしに分かり易く日本語の例えを入れて意味を教えてくれたのだった。遊びながら、日本の諺の意味をしっかりと理解したことに感心した。当時、娘のカルタの挑戦相手は夫と息子だった。一番年下の自分が勝てる喜びに連日どちらかを誘い、石畳に正座でカルタ取りに挑んでいた。わたしは真剣にいろはカルタで遊ぶ娘を見ながら、ずっとしまい込んでいた百人一首カルタを思い出した。娘が小学校4年生の時だった。これが、娘の日本語の世界を広げるきっかけとなった。

初めて札を見た時、娘は札に書かれたひらがなは読めるのに、その日本語の意味が分からずイライラしていた。わたしも百人一首の魅力を上手く紹介できなかった。そんな経験があったので、わたしは娘にとって分かり易い百人一首関連のアニメや漫画、映画等を検索し始めた。すると当時流行していた競技カルタのアニメ『ちはやふる』が挙がった。アニメの『ちはやふる』で百人一首の競技カルタを理解した娘は、次に漫画から更に百人一首の成り立ちや歌の魅力を理解していった。日本から取り寄せた小学生向けの百人一首辞典が手に入ると、一首一首の解

説を読み込み、和歌の詠まれた時代背景の知識を少しずつ深めた。日本とタイのダブルの友達  
の誕生日には、その子の名前の頭文字から始まる歌をタイ語訳し送った。娘のタイ語和訳初体  
験である。その後、娘にとって百人一首は札取りや競技ではなく、和歌に込められる美しい日  
本語と向き合う時間になった。この百人一首との出会いによって「恋」「夢」「紅葉」など、読め  
る漢字が増え「ふりつつ、ぬれつつ」等、その時代の言い回しも理解できるようになり「恋の  
仕方っていっぱいあるんだねえ」とため息をついたこともあった。

息子は龍馬の活躍した江戸時代末期に、娘は平安時代に興味をもった。この興味を何とか伸  
ばしたい。京都へ行けば自分の関心のある時代を自分の目で見て歩いて感じ、深く記憶に刻ま  
れる旅になるだろう、そう思い京都の旅を決行した。東京の旅から1年後、息子が中学1年生、  
娘が小学校5年生の時だった。息子は、龍馬が襲撃された有名な寺田屋へ、一番行きたがった。  
漫画やドラマ、本等に幾度となく登場する裏階段は印象的で、「ここを駆け上がったんだね」と  
感動もひとしおだった。寺田屋内では、自分で学んだ歴史の知識をおさらいしているようだっ  
た。展示物の説明は息子の知識で十分理解できるものが多く、息子が寺田屋内を説明しながら  
案内してくれた。今、息子は坂本龍馬が活躍した長崎県や生誕の地高知県へも行ってみたいと  
言う。持っている知識をフル稼働させ、現地のガイドができるそう。娘とは渡月橋近くの嵐山  
亀山公園を訪れた。木々に囲まれた広々した園内には、四十八首の百人一首の歌の刻まれた歌  
碑が点在していた。日本は秋の深まる季節だった。娘は紅葉の中、歌碑を見つけては読み、指  
でなぞり「ダイナミックなカルタ遊びをするみたいだね」と園内を駆け回った。

このように漫画やカルタとの出会いを転機に、わたしたち親子は変わった。子どもたちは自  
分を楽しんでいる日本や日本語の世界に出会ってから、日本、日本語への関わり方が一変し  
た。教えられた漢字を覚え、積み重ね、読めるものを読むという関わり方から、自分を楽し  
んでいる日本語の世界に自発的に関わるようになったのだ。もっと深く知りたい、そして他の  
人にも知って欲しいと、それぞれの日本、日本語の世界が広がっていったのはわたしが想像し  
ていなかった驚きであり、大きな変化だった。

それに加え、わたしの子どもたちへの関わり方も一変した。日本語ができるようになるため  
には自分がやらなければとひたすら頑張っていたが、子どもたちが漫画やカルタに出会うこと  
で、それぞれが興味のある世界を持ち始め、驚くほど日本語を伸ばすことがわかってからは、わ  
たしはその子どもの世界を広げるサポートをし、子どもたちと一緒に彼らの世界を楽しむこと  
にした。子どもたちと日本語で語り合える共通の思い出がどんどんと増えていくのは本当に嬉

しかった。そして、わたしの役割は教えることから、子どもたちの興味のある物の情報提供者になっていった。

## 9. タイの中の日本語の活動と他者との関わり

息子が京都の旅で寺田屋を案内してくれた翌年、息子が中学2年生だった時、タイのお寺が主催する歴史のある日本語コンテストに参加した。このコンテストは午前中の文法試験を合格した10名が、午後その場で出されたテーマで作文を書き、スピーチをするというものだ。それまでダブルであることをプラスに思えなかった息子が参加を決意したのは、中学に入り学校環境が変わったことが一番大きかったと思う。学校に日本語のクラスがあり、自分が必要とされる場面があること。ダブルの子たちが多く、日本語で会話でき、自分を隠す必要もなくなった。日本語に興味のある友だちがいて、自分の日本語力を褒められたことも大きな要因だっただろう。そんな中、漫画で培った日本語力でも受け入れられるのか挑戦したいと思ったようだ。実は先生の勧めで中学1年生の時に初参加し、2度目の参加だが「スピーチと作文部門が怖い」と言い、初めは自信はなかったのだろう。2度目の今回の作文は「便利な社会」、スピーチは「タイにいる外国人」がテーマだったそうだ。帰宅した息子が「今回は意外と良かった」というので、何を書き、何を話したのか聞いた。作文はタイ社会に批判的なことを書き、スピーチでも同様の内容で話したと言ったので、わたしは審査員を不快にさせたのではと少し気になった。しかし、本人は、作文は1時間半みっちり自分の考えや意見を書き、スピーチでも言いたいことが言え、伝えたいことが伝えられたと気にする様子はなかった。そして「楽しかったから次回も出たい。一緒に出よう」と娘を誘っている。それまで日本語に対して消極的だった息子が、積極的に日本語に向かう姿勢に驚いた。コンテストで日本語を話すというのは、知っている内容をただ日本語で話すのではなく、言いたい事を日本語で伝え、自分の思いを訴えるという行為だったと思う。考えを表明する手段としての日本語使用の場に積極的に参加しようとしているのである。

ここまで、わたしが文字に拘った学習から、子どもたちが漫画やカルタなどに出会い、自分の興味から日本や日本語への関心を広げた日本語との関わりの変化の経験を書いてきた。実はもう一つ、娘とわたしには家庭外で広がった日本語の活動の場があった。ここで娘は複数の言語で育つ自分に納得し、他者に自分の興味を伝える喜びを知った。わたしもまた長い間の孤独

感から抜け出すことができた。最後にこの活動との関わりについて触れたい。

## 10. BKK バイリンガル教室との出会い

南部から中部へ引っ越してきた翌年、娘が小学校4年生の時だった。タイにある「バイリンガルの子どものための日本語教室」(以下、BKK バイリンガル教室)に親子で参加したのだ。息子は前に書いたように、ダブルで二言語できても決してプラスではないと言い、学校では目立ちたくない、なるべくならダブルであることを隠したいと言った時期だったので、声をかけても来なかった。中学受験があったのが一番の理由だが、自分が目立たない場所、ダブルの子どもが沢山いる場所があることが俄かに信じられなかったようだった。「どんな子がいるの？どれくらい上手なの？」とよく聞かれた、自分の日本語がどの程度なのか分からず、それが分かってしまうかもしれない、傷つきたくない自己防衛もあったと思う。娘も実は初め参加を躊躇していた。地方暮らしでは周りにダブルの友だちがいなかったため、タイ語と日本語を混ぜて話す自分に自信を持てずにいたのだ。しかし、教室を見学した日、自分と同じダブルの子どもたちが楽しそうに参加し、一つの言語にとらわれない様子をみて安心し参加を決めた。「同じようなダブルの子たちがいっぱいいる。色んな言葉で話している子がいる、ということは、自分のように混ざることがおかしいことではないのかな、なら安心だと思った」と後で語った。教室はテーマ型にデザインされた活動が中心で、同年代の子どもたちと時にタイ語、時に日本語や英語、中国語等でコミュニケーションを取りながら、お互いのことばを尊重しながら活動を楽しんだ。BKK バイリンガル教室に通う娘は、複言語の中で生きている自分を自覚し、自分らしく自然に振る舞える場所を見つけ居心地がよさそうに見えた。一方わたし自身は保護者兼活動実践者として参加し、娘と同じ時間と場を共有することで生まれる対話を大いに楽しんだ。

娘が小学校5年生の時、高学年部に上がり、一冊の本を作成することになった。タイトルは自由、娘は迷わず百人一首を選んだ。本の構成は、百首の中から好きな十首を選び得意な絵と歌の意味を添えるというものにした。作成中は、大好きなものを紹介する本を作れる喜びで一杯だった。「色んな友だちが読んでくれるといいな」と期待し、書き間違いなど臆さず、長い説明文もどんどん書いていた。そして、幼児部の子どもたちでも興味が持てるようにと、選んだ歌の横にそれぞれ塗り絵ができるよう白抜きで挿絵を添えた。京都で撮った歌碑の写真も載せ、丁寧に作り上げた。この本の作成中ずっと「教室のみんなに自分の好きな百人一首の世界を

知って欲しい、百人一首の話先生に聞いてほしい」, 「日本人でも知らない人もいるなら、わたしが伝えたい」と言い、小学生用の百人一首大図鑑を読んで新しい発見をし、教室での対話を楽しみ、更に興味の世界を広げていった。

BKKバイリンガル教室は、娘が主体的に好きな日本語に向かい合える貴重な時間だった。それまで知識として蓄積されていた日本語が自然と生かされ、自分の持つ日本語の価値を見出し、出ていった場でもあった。

## 11. 今思う、子どもの学びと親である私ができること

龍馬の世界をもっと知りたいと掘り下げ、楽しそうに日本語で自分の思いを表現する息子と、大好きな百人一首の歌の世界へタイムスリップする娘を見ながら、振り返り気づくのは、子どもたちの知りたい、書きたい、言いたい、伝えたい、そして知って欲しいという気持ち全てが、彼らの日本語の学びに通じているということ、そして、楽しみから学び、学んだことが、更に新たな学びへ繋がっているということだ。これは漢字を学習していた時期にも、そのような時間があった。祖父母に漢字という文字を紹介したい、漢字をことばで表現してわたしに分かって欲しい、妹に貝で漢字を教えたい。このような欲求が、子どもたちの学びへ通じていた。ずっと前から、子どもたち自身の学びは存在していたのだ。しかし、わたしはそれに気づかず、漢字に拘り、漢字で日本語を教えることを止められず、子どもが楽しんでいないことを分かっているながら、頑張るしかないが無理やり頑張らせていた。子どもに「日本語はもう嫌だ」と言われた時の胸の痛みと、子どもたちの日本語をどうしたらいいのだろうという不安を思い出すと、暗い中に一人であったような感じがする。今考えれば、なぜあんなに漢字に拘り、漢字の配当表を指針としてノルマをこなすかのように子どもたちに教えようとしていたのかと思うが、そこから抜け出せないでいた。抜け出せたのは、子どもたちに漫画との出会いがあり、子どもは好きなことから学ぶのだと気付けたことが大きい。そして、わたし自身はBKKバイリンガル教室のような、相談できるコミュニティーに出会い、色んな子どもと接し、保護者との出会いがあったことも大きい。今後は生活の場が安定しそうだという心の安定も生まれ、孤立や不安から解放されたことも大きいと思う。親は、一人で子どもとだけ向き合っていてはいけないと思う。

そして、何より大切なのは子どもが好きなものと出会えるような環境作りをすることだ。何



かを好きになることから学びは起こる。その何かを見つけられるのは、一番子どもに近い親だと思う。子どもの“今”に寄り添い、その何かを見つけてあげることが親の役目だろう。好きから起こる学びは、教えることを考えるよりずっと重要なことなのだろう。

今、わたしが子どもたちへ望むもの、それは子どもたちがそれぞれ見つけた楽しい日本、日本語の世界、そして、新たに出会う世界へ探求心を持ち続けてゆくことだ。そして、親としてわたしのできることは、子どもたちの興味の世界につかず離れず大切に寄り添い、時に情報の種まきをし、よき聞き手であることである。わたしはそうあり続けたいと思う。